

力を秘めた童謡との共鳴

魅力をつなぐ 故郷創生

童謡と上野焼が融合した「協奏の庭」は、この町にしかない貴重な財産の結びつきから誕生しました。そこに人と要素のつながりが新たな魅力を生むという可能性が示されています。地域資源の価値を理解し、創意工夫が集まれば、次代に誇れる故郷の姿が見えてきます。

結びつく展望

近くにありすぎると、その存在の大切さに気付かないことがあります。日本は、世界に誇る素晴らしい伝統と文化を持っていながらも「日本の文化を日本人が一番理解していない」と指摘されることが多々あります。

この町に誕生した「協奏の庭」は、日本の文化と心の協奏がテーマ。ここで結びついた童謡と陶芸は、わが国が誇る文化であり、河村童謡と上野焼は郷土の貴重な財産です。



上野焼協同組合企画委員会
熊谷 守 代表(上野)

「いまは現実的にやきものだけの集客は難しい状況」と語る上野焼守窯の熊谷守さん。「より多くの人が上野焼に触れ、足をとめていただくためには、例えば、協奏の庭にちなんだ桃の節句や虎尾桜の季節にイベントを企画するなど、観光と結びつくと必要があります」と地域資源の連結を重視します。

一人の力、一つの要素だけでは厳しい町づくりの活性化も、人と要素の結びつき次第で、大きな展望へとつながります。地場産業や観光資源、景観や自然と一体化した取り組みが、可能性や効果を飛躍的に高めていきます。

また、福智町文化連盟の永末良一さんも



福智町文化連盟音楽部会
永末 良一 会長(金田)

「窯元や農業など、民間団体の力が集まり、コラボレーションするイベントが実現すれば、より多くの人が町の魅力に向けてくれるはず。最終的には町の活性化が目的ですから、みんなが同じ方向を向き、町全体で意見が飛び交うようになれば理想的ですね」と力を込めます。

夢、誇り、郷土愛

「まず町が誇れる伝統や文化を子どもたちに語り継ぐことが大切」と語る永末さん。大人たちが町の財産を見直し、認識する必要性を強調します。

今回、日本宝くじ協会の助成で進めら

河村光陽童謡ファイル⑤

♪仲よし小みち

「仲よし小みち」の作詞者・三苦やすしは福岡県の教師でした。歌詞にもあるように、昭和初期の県内には小さな板橋(木の橋)がいくつも架かっていて、それを子どもたちが渡りながら遊んでいました。同じ福岡出身の教師であった光陽にとって、この詩の情景は、親しみ深い光景であり、共感するところが多かったようです。子どもたちのはずむような心と足取りがリズムになった河村童謡を代表する名曲の一つです。



↑昭和初期まで町内にいくつも架かっていた木の板橋。

れた「上野焼と童謡の里づくり事業」は「子どもたちに夢と誇りを与えるもの」という前提がありました。夢や誇りが持てるということは「自分の町を好きになる」ということ。好きになればいろんな良が見え、やがて「この町をもっとよくしたい」という思いがあふれてくるでしょう。たとえ悪いところがあっても「どうにかしなければ」という気持ちにもなります。そのような思いは、次代にも生かされ、つながっていくもの。郷土で夢をはぐくみ、郷土に誇りを抱いた子どもたちは、深い郷土愛で、将来この町を支えてくれるはずです。

♪上野焼と童謡の里づくり事業

上野焼と童謡の魅力が町内外に発信し、町のイメージ向上と地域ブランド化の促進を図った(財)日本宝くじ協会による助成事業。平成22年度に「協奏の庭」と町内3か所に「シンボルモニュメント」を設置した。[写真右から]上野焼の陶土となる地層と積み重なる伝統、そこに吹く創造の風をイメージした「土」のモニュメント(田川～直方バイパス・大久保交差点)。上野焼を生み出す陶芸家の手から手へ綿々と伝わってきた伝統をイメージした「手」のモニュメント(福智町中央公民館前)。上野焼を焼成する陶芸家の情熱と400年以上燃え続ける炎をイメージした「火」のモニュメント(北九州～小竹線・飯塚市境界付近)。

photo/「仲よし小みち」のリズムが聞こえてきそうなどかな上野の風景

